

た国民、共産兩軍は、翌日から撃ち合いとなり、天津郊外には銃声が聞こえるようになった。一部の日本軍は、再武装を命ぜられ、装甲列車を急造し、再び戦線へ、私はその機関士として出勤、しかしさいわいに戦禍はなく、ぶじ解散されて帰ってきた。

八月末の国民軍の入城、九月末の米軍の入城、皇軍の姿はなく、米国大型戦車の堂々の入城式には、中国民衆は万歳を叫んで欣喜雀躍。その民衆に混って、その隙間から小さくなって行進を眺める敗戦のまじめさをしみじみと味わった。その頃から、奥地から日本人が、貨車で、徒歩で天津へ集まってきた。それ等を貨車に乗せて、かつて北支軍の供給基地貨物廠へ送る。米軍兵士が機関車へ上がってきて、走れ、走れとせめるが、機関車は弱ってしまつて蒸気があがらず、なかなか走らない。

私達十人ほどが残留を申しこんで許され、日僑の腕章を腕に巻いて、戦後復興に協力することになったが、翌年六月、留用解除となり、妻と子を連れ、米軍の上陸用船艇で日本へ帰った。佐世保から車窓に映るものは焼けの原ばかりであった。

中国青少年の育成に夢

神奈川県 戸上恭二

明治四十一年二月、大牟田市の土木建築業幾次郎の次男として出生、旧制中学校卒業後、父の建築業の手伝いなどし簿記、設計見習いしながら、音楽やスポーツ等練習にはげんだ。

大正、昭和初期、全国的不況時代にはいり、当時、南満州鉄道経営の安東小学校教師、義兄許斐卯一宅に寄居、そのすずめで同校の音楽助手をつとめ、夜間は青年学校支那語科で学習にはげみ、周囲の協力下、朝鮮の教員免許に合格、鉄嶺小学校等の助教員の道を進み、結婚して満鉄経営の鞍山公学校教師になり、中国青少年社員教育に専念、終戦まで十年間全力投球、中国青少年の育成の道を進む。

昭和初期、満州は地方軍閥の压制下で、在住日本居留民の圧迫された日常生活の不安は強く、柳條溝事変から

満州国成立時、家族五人は鞍山から宮口に移り、昭和十二年支那事変が始まり、滿鉄北支事務局管下に転任、昭和十三年三月、山海関、唐山の華北交通経営の鉄道、中国青少年教育にあたり、世界大戦の動乱下、日本制圧下の沿線は不安な日常生活の連続であった。三年間家族は九州柳川に別居、昭和十五年、濟南鐵路局管下に転任、終戦を迎えた翌年二月末まで山東省内に在住、その間、青島に転勤、家族は濟南市南郊社宅に同居、局から中国語検定試験委員拝命、局管下の沿線各地を巡回、本職の教師と相もち多忙な毎日であり、濟南鐵路局吹奏楽団員でもある私は、方面軍の慰問、毎月定期ラジオの前線慰問と軍楽隊代表の職務も課され、各地を飛びまわることも多かった。

戦争中、毎日正午前後「定期便」と呼ばれ、津浦沿線を南下する米空軍機四機は、軍施設や軍輸送列車の急降下銃撃等連日起こり、列車に乗る機会のある私は、避ける余裕がない場合、列車台下に逃げることもたびたびあった。

終戦後、単身赴任地から濟南に戻り、他の鉄道員は國

共内線のきざしが始まり、重慶政府派遣の幹部数人、通訳を命ぜられて毎日鐵路局に出席したが、大部分の社員は、八路軍に破壊された鉄道設備で、社宅は一軒おきに捕虜収容所になり、郊外では強盜等もしきり。

通貨は市内は重慶貨が強要されたが、郊外の仕入れ等は国幣は没収、北海票と呼ばれる八路軍票にかぎられ、仲を取り持つのが日本の息のかかる聯銀券で、日常の買い物ものに困り、家財道具を売り払う生活。

日本居留市民は市民権を失い、公共機関、商店は没収閉鎖、主な食料等はさいわい軍貨物廠から半年分配給され、引揚げ時まで持ちこたえたが、引揚げ日が迫り、妊婦や病人等医療もかぎられ、不幸な知らせも少なくなかった。

引揚げは治安上、郊外住民から始まり、二百人前後を一梯団として、沿線各地に先発隊の準備する仮泊に出発、一夜を貨物区の貨車に仮泊、限定され、通貨の検査があり、中国品等没収され、被害を受けた。暴行を受けかけた邦人を通訳し、やっと放免された一幕があった。

終戦まで濟南間は急行で九時間余、線路は単線とな

り、いそぎ修理された貨車はゆれながらの徐行、元氣な若者でも苦行、仮泊宿舎の食事、早朝出発の準備、仮眠の連日連夜の強行軍に半病人も多く、乳児を失った母親に埋葬の寸時もない難行、半分以上は馬車に荷物、子どもを積み、男たちが周囲を警備しながらの行進は半月、青島の仮泊所に着いたとき、元氣な男たちも、出港まで二日仮眠の連続。

引揚げのあいだ、国共両軍の勢力は、ことに強奪暴行地帯になり、危険地帯を予知して安全を頼んだ中共軍に、お礼心に麦粉半袋、煙草一本さえ、難行な日本人からいっさい受け取らない国民性は、今もはっきり覚えてる。

青島出港、米軍上陸用舟艇、船底浅く、船室にすし詰大揺れの三日間、ほとんどの難民は絶食状態の半病、佐世保上陸で一安堵。昭和二十一年四月、本籍大牟田市は戦災都市で居住不能、やむなく妻の実家、大分県東国東軍武蔵町小城坂本多重方に荷をとくが、農家ながら地主で主食少なく、山、田畑を近くの親類の協力で開墾に努める。

数年後、隣町安岐町に親類の協力で雜貨店を開き、行商を夫婦で協力するが、無一文に近い資本では、男の子三人の教育費と不十分な生計、昭和三十六年十月、安岐川の大水害で商品家具類水びたし、さいわい三男共東京附近に就職し一家を持つ等、そのすすめで湘南地に住み、住居の関係で戸塚、辻堂の会社の独身寮管理人で数年間、その間県営建築訓練校に学び、建築設計士の免許状を受け、設計事務所開設、建設会社に就職等今日いたり、男子三人も夫婦安住の地を得、老齡の身を健康第一にただ波瀾の前半生を追憶する昨今である。

中国からの引揚げ

北海道 石山 八郎

昭和十八年十月、四年間の現役北支勤務を終えた私は現地満期除隊をした。農家の五男に生まれた者にとつては落着くところがなかったからだ。華北省張店、輕金屬株式会社に入社した。